

〔書評〕

宮崎道生著

青森県の歴史

盛田 稔

私はかつて『地方史研究』誌上で、青森県の地方史研究を盛んにするには、大学の、より積極的な態度が必要であると述べたことがあつたが、その数年後、それが『地方史研究』の現状に收められるときには、弘前大学歴史研究会の活動を通し、本県の地方史研究がようやく発展期に入つたと、喜びを以て訂正したのであつた。

青森県の地方史研究の進歩を願う者の一人として、今ここに紹介する『青森県の歴史』と同名の書が、今から四年前に、宮崎道生先生のお弟子さん達を中心執筆者として、弘前大学国史研究会から刊行されたときも、本県の、てころ右通史の出現を待ち望んでいた多くの県民とともに、心から喜んでものでしたが、今回発表の『宮崎先生著の『青森県の歴史』は、向題が項目別に整理され、前回のものよりも内容が一段と深められ、すつきりと、まとまりた形のものとなつてゐるのに深い感銘を受けました。

本書を一読して、私が共感を持つた本書の増徴のオーは、その構成である。

地方史といへば、とかく、通史という觀念に拘泥し、平板な主義的な記述に終り、どこにポイントがあるのか分らないものもあるのだが、本書は、項目別の構成をとり、各時代の特徴と、現代に深いつながりを持つてゐる重要事項とを、紙数の許す範囲内で深く掘り下す、鮮明に読者の前に提供してくれてゐる。

これからの地方史研究は、このような、項目別、特殊研究に深くふみこんでいくことにより、地方の発展の跡を正確に捕えるとともに、日本史全体の研究の進展のためにも役立つようにすべきであらう。

オ二に、地方史といへども日本史の一部であり、それと別個のものでないことは勿論である。

従つて、その研究に當つては、なく史料を求め、日本的視野において記述することが必要であるが、本書はこの条件をも見事に果し、新しい視野を随處に展開してくれてゐる。

又、当然のことながら本書は、多くの人々の、本県に關する戦後の新しい研究成果を十分にとりいれてゐる。

そういう意味では、本書は、単なる宮崎先生を中心とする研究家達の著書であるに止まりず、戦後の青森県史研究の綜合成果であると言えるであらう。

しかし、本書も勿論すべての点で十分満足すべきものであるとはいいきれないし、なお研究の要が感ぜられる所も見受けられるので、以下私なりに感じた点を内容にふれたいと思う。

本書は、風土と人間、原始・古代、中世、近世、近代・現代に大分類されている。

風土と人間編では、青森県史の概観と、県民気質のよって求るところを述べ、津軽人と南部人の気質の相違に及んでいる。

その際、地理的・気象的条件の相違による両者の気質の相違を認めながら、歴史的条件のところでは、津軽と南部を区別せず、青森県民一本として取扱っているが、その歴史的條件の差、特に津軽、南部の社会を構成している人々の出身地の相違と、それら各地の人々の混入率の相違が、両者の気質に大きな相違をもたらししていると考えられないであらうか。

原始・古代編は、「アエミシの国から陸奥国へ」の副題があり、亀ヶ岡式土器と田舎館式土器、津軽蝦夷の二項に分けられているが、旧石器時代の遺跡の説明からはじまって田舎館その他から出土の弥生式土器によって、本県における稲作文化の発生から階級社会の発生に離れ、

更には、根城の鹿島沢古墳を蝦夷の墳墓とし、律令時代後期の、アエミシの国から生れては青森県は、狩猟・漁労のほか一部水田耕作をふくんだ畑作農業をいとなみ、牧馬をもおこなう、族長社会を形成していた、としている。最近の本県に關する考古学の成果を駆使し、歴史学と考古学とを巧みに結びつけ、一応の結論を出したものとして高く評価さるべきであらう。

なお、この頃の末尾で、十三藤原秀家を以て津軽氏の遠祖とする説を、津軽氏の作爲としたのをはじめ、本書が、主として近世から明治の間に、我田引水につくられた作爲と思われるものに対し、随處で批判を加えているのは、地方史研究のあり方を示すものとして意義が深い。

中世編は、「諸豪族の興起交替」の副題があり、嘉元の饗と南部牧、守東木軍の活躍、奥羽蕩平の根の城、浪岡城と新機匣の胎動等の諸項に分れている。

本県における中世は、鎌倉政権との接縁により、本県が初めて日本という統一国家の中に組みこまれた時代であり、其処に住む人々が初めて自らの意志を以て積極的に行動した時代であり、その行動が日本的意義を持つた時代であり、本県人の原流的人々の移住してきた時代であり、それに伴って若干の中央文化が流入してきた時代であり、多くの村落が形成され、稲作や牧畜が定着した時代であり、動乱につぐ動乱の中から近世的秩序のもと

となるものが芽生えてきた時代であったが、この篇は、
こういった面をよく捕え、副題の示すように、十三藤原、
管我、安東、北畠、南部の諸氏や修験勢力の性格づけと、
その複雑な興亡の末、南部氏が一応霸權を握るに至る経
過を産業や文化の姿をおりまぜつつ要領よくまとめてい
る。

本県中世史の史料の白眉は何といつても南部家文書（
管我文書を含む）であるが、近末その全貌が岩手の森森
兵紅氏の努力により明かにされるにのれ、本県において
もその研究がようやく進み、本書にみられるような形で、
このつきにくい中世史研究への手がかりが示されるに至
つたことは一般研究家にとつてこの上もない喜びであろ
う。

なお、ここで欲をいうなり、藤原秀家が津輕氏の遠祖
であることが否定された場合、その子孫とされる種里入
部・光信の祖父元信や、元信の子の則信の立場はどうなる
か、光信を金沢氏とする金沢系図等重要な異説もある
し、この点に一言触れてほしかった。

近世篇は、「二つの藩政」の副題のもと、新しい政治
地図、向い鶴と牡丹の紋、開発すすむ津輕、南部、西廻
り、東廻り海運と文化の流入、ゆれる津輕藩政と改革、
八戸藩政の危機と改革、藩民の生活、文運の高揚等の諸
項目に分けられ、近世津輕藩、盛岡藩及び八戸藩の成立
から、藩政の確立、発展、動搖、改革の姿を、特に津輕

・八戸両藩を対比させつゝ、藩民の生活にも触れながら
解明している。

本篇中、津輕独立の英雄為信の出自を南部氏とする断
定は、本県史学界としては最初のものであるが、その断
定の史料を最初に発表した私としては感無量のものがあ
り、又、為信と南部信直の人物を比較して為信に軍配を
あけている点、津輕三代藩主信義の暗君説を否定し、そ
の業績を正当に評価した点、津輕の宝曆の藩政改革の担
手乳井貞と八戸の文政・天保の改革の担手野村軍記の業
績を比較して軍記を勝れりとする点等何れも同感である
が、なお若干疑問の点もあるので、その二、三をかゝり
てみる。

①「日本祖統志」（『青森県祖統誌』引用）及び「大岡
令限帖」（内閣文庫蔵）に、秀吉時代の津輕の石高をそ
れぞれ三四〇〇〇石、三五〇〇〇石としているのを全く
無視してよいかどうか。

②津輕の新田開拓が極めて急速に進められたとするこ
とについては同感であるが、単純に内高即興農業生産高
といった見方が妥当であるかどうか。津輕九十万石説は
論外とするも七十万石説、六十万石説は考慮の要があり
はしないだろうか。

③近世の津輕の農民の生活に余裕がなかったといつが、
確かに五口小役米を含めて、持高の多少にかかわらず、
その大割四分を年貢として徴収するのは苛酷にすぎるよ

しかし、それにしても、津輕における百姓一揆の発生件数が極めて少なく、しかも一、二の例外を除いて極めて不徹底に終わっているのはどういうわけであるのか。

この向の事情は、農業の実際の生産力の着量なしには説明され得ないのであるか。

④ 八戸藩に關する記述については、多くの点で同感であるが、八戸藩が農業生産に依存しては存立できず、盛岡藩や津輕藩とは異なつた、農業以外の産業に依存する産業構造をとつたといわれるが、断く断定することが出来るほど農業以外の産業の比重が高かつたかは疑問であり、仮りにこういう説を是認するとしても、それは近世後期以降に限らずに古くはならないのではあるか。

又、八戸藩の場合特に重税が強調されている。近世後期の重税は、近世諸藩に一般的傾向であり、それらと比較するとき、八戸藩の税率はむしろ低かつたといふのが私の持論であり、それがそれと反対の森氏の説や本説がでた以上、私としては、更に研究を進めていきたい。

なお、八戸領で弘化・嘉永の二度にわたつて大規模な百姓一揆が発生したといわれるが、弘化年代の一揆は弘化三年、志和通りで、名主の苛酷な税金取立てに反対し、百数十人が打ちこわしを行ったものだけであり、又嘉永年費には、八戸領内に百姓一揆はおきていない。

これは、盛岡領の、弘化四年並に嘉永六年の、野田・室古・大槌の一万数千人から二万数千人に及ぶ大百姓一

揆と混同したものであると思われる。

八戸藩の大百姓一揆をあげるならば、天保五年のそれをあげなくてはなるまいが、このときの一揆の直接の動機は、八戸藩が天保の凶作対策として、一人、一日に付稗三合の保有を認め、他は強制買上げをすることにしたことにあるとされている。

極端に貧困だと思われている八戸領の百姓が平時一日俵三合以上の生活をしていたということも驚きであり、こつた点からも年貢の過重といふ点問題は更に検討しなければならぬ問題だと思ふ。

⑤ 町人の生活の項にある「商業は主として城下においておこなわれ、在町ではおし方べて日常の必需品を取扱う小商人の存在がみられるだけだ」といふ点について、原則的には賛成であるが、青森・深浦・鰺ヶ沢・野田地等のような商業都市もあれば七戸・五戸といった政治都市もあり、其処には藩の長者番付に名をのりぬるような大商人が多数いたことを見逃してはならないし、又例えは、寛政八年頃、津輕の広田組だけでも、大工八、桶屋五、鍛冶屋五、染屋五、室屋四、烏屋五、油絞屋二、豆腐屋四、菓子屋一、造酒屋二、酒杜司二、質屋二、魚屋一、木綿・古手・細物屋四、荒物屋二、瀬戸物屋一、味噌しよの油小売一、染屋型付三、煮売屋一、茶籠直し一、巻物師一、髪形一、風呂屋一、といった商人工人在りたことなども書いてほしかつた。（『平山日記』による）

⑥なお、今後のことについて希望を述べるならば、表高に對し内高或は実收高が格段に高かつた津輕藩がどうしてあれほどの財政窮乏を来たのか、藩の財政構造はどうなつていたのか、又農村の階層分化や、商業資本の発展、それらと藩の財政窮乏との關係の有無等についても御教示いただきたいと思う。

近代・現代編は、「進歩と保守の共存」という副題のもと、青森県の誕生、東奥義塾と自由民権、近代化と本県經濟、新しい生活文化、デモクラシーと大陸進出、夢はもて来県の諸項に分れている。

私は近代史についてはよくわからないし、又近代史においてどういう内容のものを取上げるべきかの定式化もまだなされていないのではないかと思うが、おおむね、取上げるべき問題は取上げていけると思われる。

本県は、後進県といわれているが、近世封建時代における本県は、津輕の農民の農産生産力が、徳川幕府の理

想とした、十石、一町歩を上まわつていた事実や、江戸藩後期における産業の發展等を考慮すれば、一部の南部地域を除いて、封建制という枠の中では、決して後進地ではなかつた。

それが現在後進県といわれるに至つたのは明治維新以降における、日本の政治的中心との接觸不在、政治不在に、或は政治があつたとすればそれは、富国強兵策における強兵の供給地として、農業県に止めておくという政治に基因するものと私は思っている。

本県の近代史をみる場合、こういう観点から見るのも一つの方法ではないだろうか。

以上色々述べたが的はずれの批評もあつたかと思ひますので御叱正を願います。

(県史シリーズ2、約三二〇頁 山川出版社刊)

オニ版 五八〇円)